

講座・部門の増設、大型設備の共同利用のためのセンターの新設等が討議された。しかし、共同利用研究所の設立に関して、文部省学術審議会の意向もあり、否定的であった。審議の途中で、文部省の係官の交替があったりして、審議の終了が遅れたが、今年6月23日の測地学審議会・気象水象部会で結論が出された。これは、各省庁への建議ないし要望として取り扱われないうで、測地学審議会総会で報告される事となり、7月21日の同総会で報告され、了承された。

「わが国の大気物理学（気象学）の研究・教育体制について」の測地学審議会での報告の骨子は、次のようなものである。大気物理学の現状と動向を概観し、特に、諸外国に比べて、研究・教育体制が極めて貧弱である事

を指摘している。一方、GARPのような国際協力事業が実施され、また、世界気候計画（World Climate Programme）や中層大気計画（Middle Atmosphere Programme）が立案中であって、このような国際的共同研究に対するわが国の協力体制の強化の必要を述べている。

そして、今後、特に推進すべき重要課題として、大気大循環モデルの確立、気候変動の研究、環境汚染の大気物理学的研究、降水機巧と気象調節の研究を挙げている。これらの重要課題の解明やその基盤となる大気物理学研究の推進のためには、大学における研究体制の強化と、それによる人材の養成が必要である事を述べている。そして、大型研究設備を整え、その共同利用をはかる事も将来考慮すべき事を指適している。



飯田睦治郎著

雲

野外ハンドブック5，山と溪谷社  
1978，255頁，1,600円。

毎日、何気なく眺めてやりすごしている雲も、それを写真に撮って整理したものを示されると、今さらのようにその変化の多様さに驚いてしまう。この本は、日本各地で撮られた種々の雲の写真を一般の人でも容易に親しめるように雲の図鑑風にまとめたもので、それらは十種雲級別に整理されている。各種の雲は、国際気象通報式を基にして、観天望気にも役立つようにさらに細かく分けられている。このような本は、単に気象学に対する知識を持っているだけではなく、ふだんの雲の観察と豊富な登山経験を通して培った観天望気に対する知識をもった著者のような人がいて、初めてで上がる種類の本であろう。それはちょうど、トランジスターや真空管の原理は分かっているが、テレビラジオを設計したり修理できることにはならないのと事情が似通っている。

大気中の水蒸気が、大気中の大規模な流れによって運ばれ、シノプティックな状況如实に反映していることは、最近のMETEOSATによる赤外線中の水蒸気帯の観測から、見事に示された通りである。また、それが凝結によって可視化した雲の分布が、シノプティックな状況と良く対応している事も、衛星写真から良く知られている通りである。しかし、これらの事実が明らかになる以前から、経験の集積としての天気俚言に象徴されるよ

うな観天望気が存在していた。だが、低気圧の構造や、シノプティックな状況と雲の対応についての基本的理解の進んでいる現在では、いわば科学的な観天望気の骨格ができ上がっている段階にある。その骨格に肉付けを施そうというのがこの著者のねらいであると言えよう。

私自身観天望気については素人であり、十種雲級を区別する程度の知識しか持ち合わせていない。でも、この本の写真を眺めているとさすがに数多くの写真の中から厳選されただけあって見ているだけで楽しくなってくる。そして、かつて天気予報の原点であった“雲”を、もう一度改めて眺めてみようという気を起こさせてくれる。

この本の対象は、前にも述べたように、気象の専門家ではない。そのせいもあり、またおそらく紙数の制限もあってのことと思うが、雲の成因や、シノプティックな状況との対応について、もっと詳しい記述があればという気がする。言い換えれば、この本に述べられている観天望気は、ただ単に経験の積み重ねを基にしたものではなく、気象学の知識を基にしたものであるという事をもっと読者に分からせるような記述が、それぞれの雲の写真の説明のところにもあったらという気がする。

これは私ごとであるが、振り返ってみて、これまでに雲の種類をまともに習った記憶がない。だから今、もしも国際気象通報式に従って雲を観測せよと言われても、とまどってしまうことだろう。もしも私と同じような人がいたとしたら、この本はそういう人にとって、うってつけの雲の手引書となってくれることだろう。

（時岡達志）